小学校第5学年における外国語教育
～外国語科の単元指導計画の作成を目指して～

島根県教育センター　企画・研修スタッフ　須田　香織

【　要　旨　】

本研究は、今までの小学校の取組の成果を生かしつつ、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語活動・外国語編』で求められている資質・能力を育成する教科指導を行うための単元指導計画の作成を目指して、小学校高学年における外国語活動と外国語科の相違点を明らかにし、小学校第５学年の外国語活動における実態調査を行った。教科化によって目標、指導内容、評価方法が変わることや、教師の働きかけが児童の意識に影響を与えることが見えてきた。

【キーワード：小学校外国語科　　教科化で変わること　単元指導計画】

１．問題の所在

社会の急速なグローバル化の進展の中で、日本における英語力の一層の充実は、極めて重要な問題であり、平成 26 年に「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」が示された。さらに、平成 29 年には新学習指導要領が公示され、小学校では中学年に外国語活動、高学年に外国語科が新設された。

教科化に伴い、教科書の給与、数値による評価だけでも、大きな変化だと言える。それ以上に、授業者にとっての不安は、日本の教育において今までに、小学校で英語を教科指導した者が誰一人いないことではないだろうか。

島根県教育センターでは、校内研修を支援する目的で出前講座を実施している。外国語教育への依頼は、平成 28 年度０件、平成 29 年度 10 件、平成 30 年度７件あり、教科化に向けての関心が高いことが窺える。学校からは、外国語活動と教科指導の違いや、教科指導の在り方に関する質問や研修内容の要望が多くあった。

そこで、本研究では小学校高学年における外国語教育がどのように変化するのかを明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

小学校の教員が、『小学校学習指導要領解説外国語活動編』（平成 20 年告示）（以下、現行 CS という）の下で行ってきた取組の成果を生かしつつ、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語活動・外国語編』（以下、新 CS という）で求められている資質・能力を育成する教科指導を行うための単元指導計画を作成することを目指して、次の二点を実施した。

（１）現行 CS と新 CS を比べ、変わること及び変わらないことを明らかにする。

（２）現行 CS の下での授業の実際を把握する。

３.研究の方法

上記２（１）については、現行CSと新CSの目標と評価の観点の相違点を明らかにする。

上記２（２）については、松江市立津田小学校に研究協力校を依頼し、授業観察、ビデオ分析、児童のアンケート調査及び授業者への聞き取りから、次の点を把握する。

・目標を達成するための手立て

・教師の手立てが児童に与える影響

４.研究の計画

研究の方法に基づいて、次のように研究計画を立てた（**表１**）。

表１　研究計画

月	内　容
６月	協力校と打ち合わせ
７月	協力校と単元構想に関する協議
12月	新学習指導要領における評価についての調査研究
１月	授業実践における調査 １/10、１/15、１/17、１/22、 １/24、１/30
１月 ～３月	授業実践における調査結果の分析 単元構想案の作成 研究のまとめ

５.研究の内容

（１）小学校高学年における現行 CS と新 CS の相違点の調査・分析

①目標について

現行 CS の目標は、外国語活動として「コミュニケーション能力の素地を養う」であることに対して、新 CS では、外国語科として「コミュニケーションを図る基礎的な資質・能力の育成」となっている（**表２**）。また、目標の数や内容については、現行 CS では目標が一つであるが、新 CS では、外国語科の目標と領域別の目標に整理されている。

②学習評価について

・評価の観点

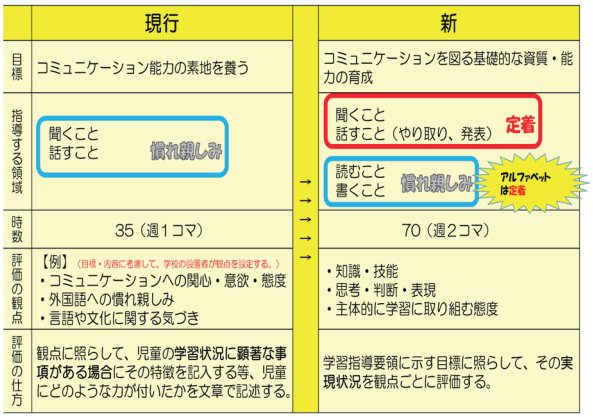
現行 CS では、基本的な評価の観点は、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語への慣れ親しみ」、「言語や文化に関する気づき」であるが、『小学校外国語活動における評価方法等の工夫のための参考資料』（国立教育政策研究所教育課程研究センター平成 23 年 11 月）によると、「設置者において、学習指導要領の目標及び具体的な活動等に沿って評価の

表２　学習指導要領における目標　新旧対照表

現行（令和元年度現在）		令和２年度より実施の学習指導要領				
外国語活動の目標		新の外国語科の目標		領域別の目標		
外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。	→	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎的な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。		聞くこと	ア イ ウ	ゆっくりはっきりと話されれば，自分のことや身近で簡単な事柄について，簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。 ゆっくりはっきり話されれば，日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取ることができるようにする。 ゆっくりとはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。
	→	知識・技能	（１）外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	読むこと	ア イ	活字体で書かれた文字を識別し，その読み方を発音することができるようにする。 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。
	→	思考力・判断力・表現力等	（２）コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語や語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。	話すこと［やり取り］	ア イ ウ	基本的な表現を用いて指示、依頼したり、そられに応じたりすることができるようにする。 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問したり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。
	→	学びに向かう・人間性	（３）外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	話すこと［発表］	ア イ ウ	日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。 自分のことについて，伝えようとする内容を整理した上で，簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。
				書くこと	ア イ	大文字，小文字を活字体で書くことができるようにする。 また，語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。 自分のことや身近で簡単な事柄について，例文を参考に，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。

観点を設定することとし、その観点と照らして、児童の学習状況に顕著な事項がある場合にその特徴を記入する等、児童にどのような力が付いたかを文章で記述する」としている。[1)]

これに対して、新 CS では共通の観点「知識・技能」、「思考、判断、表現」、「主体的に学習に取り組む態度」（**図１**）が示され、それぞれの観点から分析的に捉える「観点別学習状況の評価」を実施するものとしており、望ましい学習状況が認められる観点、課題が認められる観点を明らかにすることとしている。



	現行		新
目標	コミュニケーション能力の素地を養う		コミュニケーションを図る基礎的な資質・能力の育成
指導する領域	聞くこと 話すこと　慣れ親しみ		聞くこと 話すこと（やり取り、発表）　定着 読むこと 書くこと　慣れ親しみ　アルファベットは定着
時数	35（週1コマ）		70（週2コマ）
評価の観点	【例】（目標・内容に考慮して、学校の設置者が独自を設定する。） ・コミュニケーションへの関心・意欲・態度 ・外国語への慣れ親しみ ・言語や文化に関する気づき		・知識・技能 ・思考・判断・表現 ・主体的に学習に取り組む態度
評価の仕方	観点に照らして、児童の学習状況に顕著な事項がある場合にその特徴を記入する等、児童にどのようなかが付いたかを文章で記述する。		学習指導要領に示す目標に照らして、その実現状況を観点ごとに評価する。

図１　現行 CS と新 CS の相違点

③考察

現行 CS も新 CS でも、外国語活動・外国語科で目指す方向は、「コミュニケーション能力の育成」としており、大きな変更はないと考える。それぞれの目標にある「素地」（現行 CS）と「基礎」（新 CS）は同義に思えるが、「コミュニケーションの基礎を養う」ことを目指しているのは、現行の中学校学習指導要領であることからも、教科化によって、目標がレベルアップしていることが分かった。

また、授業で扱う領域（読むこと、書くこと）が増えたり、評価の仕方が変わったりすることが分かった。中でも教師にとっての大きな変化は、評価方法が変わることだと考える。

現行 CS では、児童の学習状況に顕著な事項がある場合にその特徴を記入する等、児童にどのような力が付いたかを文章で記述するとしており、すべての観点について児童の学習状況を見取る必要がなく、顕著な事項がない場合は記録を残すことも求められていなかったと言い換えることができる。これに対して、新 CS では、すべての観点において、児童たちの学習状況及び達成状況を分析的に見取る必要がある。この違いは大きいと感じる授業者も多いのではないか。学習状況の顕著なもののみを見取る場合と、すべての観点において学習状況及び達成状況を見取る場合では、授業者がすべきことは数段増えると考える。

思考・判断・表現	自分のことや相手のことをよく知るために、将来の夢について、簡単な語句や基本的な表現を用いて、将来就きたい職業やその理由を伝え合っている。

評価規準の作成については、現行 CS においても求められていたが、新 CS では評価規準を拠り所として、児童の学習状況をすべての観点について分析するため、今まで以上に具体的な評価規準が必要になることが予測される。

評価の観点については、外国語活動から外国語科へ変わることを考えれば、はっきりと正確に分けることはできないと考えられる。例えば、現行の観点「外国語への慣れ親しみ」は、新観点「知識・技能」に主に移行すると考えるが、新観点「思考・判断・表現」にも関連すると考えている。まずは、どのように移行するのかを整理する必要があると考えた（**図２、３**）。

そして、目標の到達状況を見取るための具体的な児童の姿を表す例も必要であると考え、「思考・判断・表現」の観点を例にして、以下のように整理した（**図４**）。

（b）「おおむね満足できる状況」：就きたい職

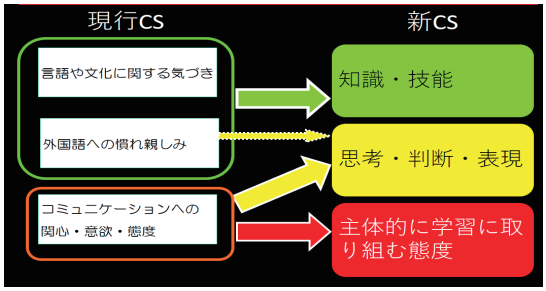


図２　評価の観点　新旧対照表

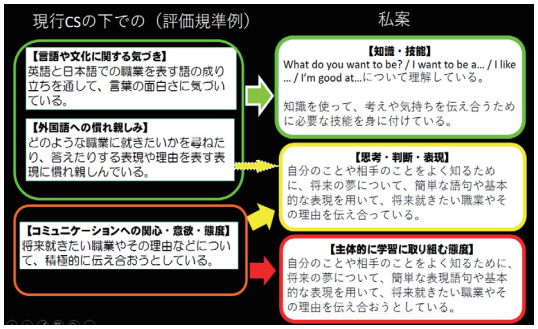


図３　評価規準　新旧対照表

業とその理由を述べている。

（ａ）「十分満足できる状況」：上記（ｂ）に加え、その職に就いてから行いたいことやその職に就くために行っていること等を述べている。

（ｃ）「努力を要する状況」：（ｂ）を満たしていない。

図４　児童の具体の姿例

（２）津田小学校における授業の実際

【期日】令和２年１月10日（金）～１月30日（木）

【単元名】What would you like?

～島根のおすすめの名物やお土産を紹介しよう～（We can 1, Unit 8）

① 単元目標

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	他者に配慮して、進んでほしいものについて丁寧に尋ねたり答えたりしようとする。
外国語への慣れ親しみ	ほしいものについての丁寧な表現の仕方や尋ね方に慣れ親しんでいる。
言語や文化に関する気づき	世界には様々な食生活があることや、ほしいものを尋ねたり答えたりする際に英語にも丁寧な表現があることに気づいている。

② 単元の評価規準

ア	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	他者に配慮して、進んでほしいものについて丁寧に尋ねたり答えたりしようとする。
イ	外国語への慣れ親しみ	ほしいものについての丁寧な表現の仕方や尋ね方に慣れ親しむ。
ウ	言語や文化に関する気づき	世界には様々な食生活があることや、ほしいものを尋ねたり答えたりする際に英語にも丁寧な表現があることに気づく。

③ 単元指導計画

授業者は、次の**図５**のように単元指導計画を立てた。

時	目標と主な活動	評価の重点 コ	慣	気	評価規準 【観点】　（方法）
1	○世界の様々な食生活と注文する時の丁寧な表現の仕方を知る。 ・国際交流員からの食文化紹介（4か国） ・【Let's Watch and Think1】①② ・【Let's Watch and Think2】 ・【Let's Listen1】			○	・国際交流員からの話や映像資料を見て,世界の名物料理や言語に興味をもったり,丁寧に注文する英語表現に気づいたりしている。 （行動観察・振り返りカード）
2	○丁寧に注文を尋ねたり答えたりする英語表現に慣れ親しむ。 ・Small Talk　好きな食べ物 ・【Jingle】 ・注文しよう P.60 ,61 ・【Let's Listen2】		○		・丁寧に注文を尋ねたり答えたりしている。 （行動観察・振り返りカード）
3	○値段を尋ねたり答えたりする英語表現に慣れ親しむ。 ・【Jingle】 ・【Let's Watch and Think1】④⑤ ・【Let's Listen2】 ・注文しよう P.64 ,65		○		○値段を尋ねたり答えたりしている。 （行動観察・振り返りカード）
4	○丁寧に注文や値段を尋ねたり答えたりする英語表現に慣れ親しむ。 ・Small Talk　飲みたいもの ・【Let's Listen3】 ・注文しよう（P.64 ,65&島根バージョン）		○		○丁寧な表現で注文や値段を尋ねたり答えたりしている。 （行動観察・振り返りカード）
5	○「Shimane Food Market」の準備をしよう。 ・【Jingle】小文字を書く ・お店の準備（看板や絵カード）	○			○島根の名物やお土産の良さを伝えている。 （行動観察・店の看板・絵カード・振り返りカード）
6	○友だちに伝わるように工夫して,丁寧な表現を使って注文したり受けたりしようとしている。 ・【Jingle】ペアで交代に言う ・島根の名物やお土産のお店紹介 ・「Shimane Food Market」前半 ・中間評価,感想 ・「Shimane Food Market」後半	○			○友だちに伝わるように工夫して,丁寧な表現を使って注文したり受けたりしている。 （行動観察・店の看板・絵カード・振り返りカード）
7 本時	○ALT と国際交流員に丁寧な表現を使い,進んで伝え合う。 ・島根の名物やお土産のお店紹介 ・「Shimane Food Market」前半 ・中間評価,感想 ・「Shimane Food Market」後半 ・感想交流	○			○お客さん（ALT,国際交流員,友だち）に丁寧な表現を使い,進んで伝えようとしている。（行動観察・店の看板・絵カード・振り返りカード）

図５　単元指導計画

④　単元目標を達成するための手立て

外国語活動の特質上、単元のはじめには「言語や文化に関する気づき」に重点を置いた指導を行い、徐々に「外国語への慣れ親しみ」から「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」に重点を置いた指導に移行する単元構想を立てている。ここでは、時系列で指導の実践を整理する。

（ｉ）上記②-ウについて

・児童が食文化の違いを感じることで、異文化に興味をもったり、自分たちの食文化について改めて考えたりすることを願って、第１時に、国際交流員による自国の食生活についての話を聞く機会を設定した。

図６　第１時：インドの食文化紹介の様子

（ⅱ）上記②-イについて

・第２時からは、児童が言語材料をどの場面で、どのように活用するとよいかを理解するために、食事やお店の場面をALTとデモンストレーションをしたり、児童が言語材料を活用する学習活動を設定したりした。また、新出の言語材料の意味を理解した上で音声化できるように、「聞くこと」の活動を十分に行った上で、「話すこと」の活動を行った。

図７　教師とALTとのデモンストレーション

（ⅲ）上記②-アについて

・児童が本単元の見通しをもてるように、単元最後の言語活動「児童たち自身がすすめる島根の名物やお土産をALTと国際交流員に紹介する」について伝えた。

・第７時では、児童が言語材料(would　you like)の使用場面を体験的に理解できるように、島根の名産を売る活動を単元の最後に設定した。その際、児童が英語を話したい、英語で伝えたいという気持ちが高まるように、再び国際交流員を招いた。

図８　第７時：島根の名産を販売する様子

⑤　上記④-（ⅱ）における指導の実際と分析

【第２時の目標】

丁寧に注文を尋ねたり答えたりする英語表現に慣れ親しむ。(外国語への慣れ親しみ)

◎は教師、☆はALTの発話、◇は児童の発話を表している。（　）は授業の様子である。

デモンストレーション１　教師：店員　ALT：客	
◎	ここは高級なレストランです。今から（料理人の長い帽子をかぶりながら）I'm a chef. シェーン先生は・・・
☆	I'm a customer.
◇	Customer…customer…（数人が繰り返す）
◎	（デジタル教科書の画面を示しながら）It's so delicious.
◇	Delicious…delicious…（数人が繰り返す）
◎	What would you like?
☆	I'd like ice cream.

◎	Ice cream?　One, two, three, four…What taste?
☆	I'd like chocolate.
◎	You'd like chocolate ice cream?
☆	Uh-huh.
◎	I see.　What would you like for drink?
☆	I'd like mineral water.
◎	Mineral water….Oh, it's healthy.
◇	（ざわつく）
◎	OK, chocolate ice cream and mineral water. Here you are.
◎	Are you still hungry?
	（以降、上記のようなやり取りを二度繰り返す。）

デモンストレーション２　教師：店員　児童：客	
◎	（クラス全体に向けて）Are you hungry?
◇	Yes!
◎	（ある児童に向かって）　What would you like?
◇	（困っている又は考えている様子）
◎	I'd like…
◇	Fruit
◎	Fruit!　What fruit?
	Watermelon, melon, grape, strawberry?
◇	Orange.
◎	Oh, you'd like orange.　I see.
◎	（他の児童に）What would you like?
◇	I'd like cake.
◎	You'd like cake.　That's good.　What taste?
◇	Chocolate cake.
◎	I see. You'd like Chocolate cake.
	（この後も複数の児童に問いかける）

デモンストレーション３　児童：客　ALT：店員	
◎	What would you like?
◇	I'd like…

◎	（画面を指さす）（**図８**）
◇	daifuku.
◎	Daifuku?　It's sweet.
	（他の児童とデモンストレーションをする）

図８　デモンストレーション３の様子

デモンストレーション４　児童：店員　ALT：客	
◇	（ALTに発音を尋ねながら）Wh… What… wo… wo… would… you… like?
◎	I'd like ice cream.
◇	Here you are.
◎	（他の児童二人とデモンストレーションをする）

【児童同士のやり取り】

児童は、デモンストレーションを見て、これから自分たちが行う活動の流れを理解したり、実際に使う英語表現を十分に聞いたりした後、教材のイラストを見ながら、児童同士でペアを作り、お互いに自分の食べたいものを注文する。

・会話例　店員：What would you like?
　　客　：I' d like a pizza.

筆者は、次のように児童６名の見取りをし

店員と客の発話を正しく音声化できている。	２名
店員と客の発話を正しく音声化できていない。	４名

指さし等も含め、注文している。	６名
注文できていない。	０名

笑顔で楽しそうに活動をしている。	５名
緊張又は恥ずかしそうに活動をしている。	１名

【児童の振り返り】

29名の児童の振り返りの記述をまめると、「難しかったが、楽しかった」のような困難さを感じつつも楽しかった等の肯定的な感想や、次への期待を述べたものが17件、ペア活動や代表でデモンストレーションを行った感想を述べたものが９件あった（**図９**）。

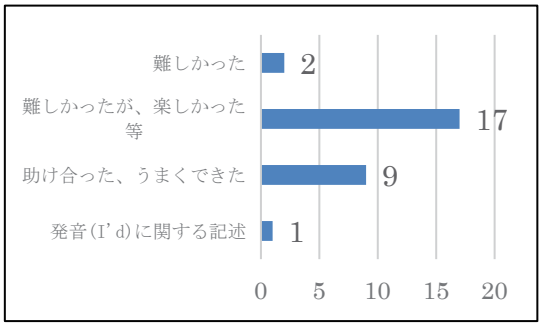


図９　第２時：児童の振り返り

【考察】

（ｉ）意味のあるやり取りについて

本時の目標は、「丁寧に注文を尋ねたり答えたりする英語表現に慣れ親しむ。(外国語への慣れ親しみ)」であった。具体的な児童の姿としては、児童A:What would you like? 児童B:I'd like soba. である。児童同士でのやり取りの前に、児童が新出言語材料を聞いた回数（教師、ALT又は児童の発話のよる）は、What would you like…?は合計19回、I'd like….は20回であった（**表３**）。感覚的でしかないが、活動の前のデモンストレーション(聞かせる回数)としては、多いと考える。

英語を話せるようするためには、シャワーのように英語を聞かせることが大事という話はよく聞くが、量ではなく質が重要であると考える。つまり、気持ちや事実を伝える「意味のある」やり取りをたくさん聞くことが、その言語材料の使用場面を体験的に理解し、その言語材料を使って気持ちや事実を表現することにつながると考える。

（ⅱ）新出表現の発音について

What would you like…? I'd like….は本時の新出言語材料であり、この表現は児童にとって音声化するのが困難であることがうかがえた。特に英語学習の初期段階の日本語話者にとって、母語にないWh、wの音、そしてwould youのdとyが繋がる音は、音声化しにくいのではないかと考える。また、振り返りでは一人の児童が「I'dのdの部分の発音が難しかった」と発音について言及している。このdの音も日本語にはない破裂音であることと、児童はI like….に慣れていることから、本時の新出表現は両方とも発音が困難だったではないかと考えた。

実際に、児童同士のお店屋さんのやり取りを観察していると、筆者が見取った児童６名の内、What would you like? I'd like….の両方を音声化できていた児童は２名であった。しかしながら、６名中の５名が笑顔でやり取りをしていたのが印象的であった。

26名の振り返りを見ると、「難しかったが、楽しかった」との回答が19件もあった。この背景には、気持ちや事実を伝える「意味のある」やり取りが関係しているのではないかと考える。母語と違って、発音などへの困難さは感じつつも、目の前の相手と気持ちが通じ合うことへの喜びを感じられるため、多くの児童が「難しかったが、楽しかった」と回答したのではないかと考える。

意味のあるやり取りを十分に聞き、その後に意味のあるやり取りを実際に行う機会を設けることは、教科化されてからもぜひ続けていき

たいポイントである。

1　あいさつ
2　今日のめあてを知る
3　Shimane Food Market を開こう。
・やり取りの言い方や、活動の流れを確認する。
・グループで準備（練習）をする。
［前半チーム　販売］
・中間の振り返り
［後半チーム　販売］
4　Shimane Food Market で自分が選んだ物を紹介しよう。
・自分が買ったものをワークシートに書き写す。
・買った物の名前、味、よさをペアに伝える。
5　振り返り
・ALT と交流員からの感想を聞く。
・自分の感想を発表したり、カードに書いたりする

⑥　教師の言葉掛けと児童の意識の関連

【第７時のめあて】

相手に伝わるように、島根の名産やお土産を売ろう。（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）

【本時の児童の活動】

本時の児童の活動「２　今日のめあてを知る」で、指導者は相手に伝わるための工夫を児童たちに問いかけ、三つを意識して取り組むようにクラス全体で選んだ。意識する三つの事柄は、「相手の目を見る」、「ジェスチャー」、「もっと大きな声で」である。教師は、この三つを板書で示した。

【中間の振り返りの実際】

◎は教師、◇は児童の発話を表している。

◎	前半やってみた感想、うまくいったこと、工夫したこと、困ったことなど教えてください。
◇A	相手の目を見て言えたので、よかったです。
◎	相手の目を見て。ここでBさんとCさんもやっていたね。（板書「相手に伝える工夫」を指さしながら）本当にコミュニケーションしていたね。 Dさん、どうですか。
◇D	ジェスチャーがちょっとできていなかったので、もうちょっとジェスチャーをやりたかったです。
◎	（板書「相手に伝える工夫」のジェスチャーに〇印を付けながら）ここのところを強調してみよう。次の機会にね。Eさんは？
◇E	相手の目を見て、手を付けたりして言えたのでよかったです。
◎	あぁ、Eさんは（板書「相手に伝わる工夫」を指さしながら）これができたんですね。
◎	私は、Fさんが困っているのを見ていてたんだけど、これ（児童が作ったお店の看板）をこうして、指さしながら説明していましたね。国際交流員のルークさんは何を買ってくれましたか？ Beefsteak and rice? ビーフステーキとライスを買ってくれたんですね。上手に渡せましたね。ずっと英語で話していましたね。指さしながら伝えていたところもよかったですよ。 ㋐困ったことはありましたか。困ったときには、ペアやグループで声かけ合ってやりましょうね。

表３　児童が耳にした言語材料の回数

	教師とALT	教師と児童	児童とALT
What would you like…?	6	8	5
I'd like….	9	6	5
You'd like….	1	9	0

【児童の振り返り】

本時の児童の振り返りシート26名分の記述内容を次の４点で整理した。その結果は**図10**のとおりである。

・相手に伝わる工夫
・売ること
・言語面
・助け合うなど人との関わり

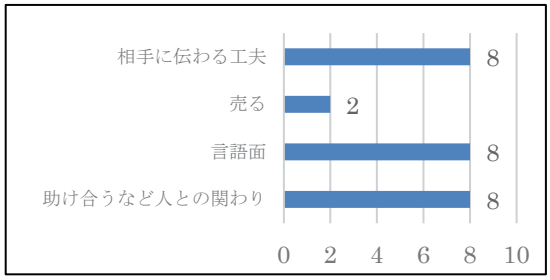


図 10　児童の振り返り　記述内容

【考察】

教師の働きかけと児童の意識との関連を調査した結果、第７時での教師の言葉掛けが、児童の意識に影響を与えていたことが分かった。

（ｉ）相手に伝わる工夫について

図10を見ると、全体26名の約3分の１にあたる８名の児童が、本時のめあて「相手に伝わるように」に関する記述をしており、その中で、全体で共有したキーワード（相手の目をみて、ジェスチャー、大きな声）が11件あった。この結果をもたらした要因は次の二点であると考える。

一点目は、児童自身が本時のめあてについて考えたことである。教師は、本時のめあてを示しただけでなく、「相手に伝わる工夫とは何か」を児童に問い掛けた。児童は過去の経験や他教科で学んだことをつなぎ合わせて、本時のめあてについて、自らが取るべき行為（相手に伝わる工夫）を考えたことが、児童の意識に残ったのではないかと思われる。

二点目は、教師のフィードバックである。教師は、Shimane Food Marketの活動前半の終了時に「中間の振り返り」を設定した。ここでは、児童が自分の行動を振り返った後に、数名がクラスメイトの前で自分の振り返りを発表した。そこで教師は、児童の発言を繰り返したり、板書を指し示したりしていた。児童の学びを認め励ましたり、よい取組を全体に紹介したりして、価値付けていた。こうした教師のフィードバックが、児童の意識や行動を繰り返すことにつながったのではないかと考える。

（ⅱ）助け合うなど人との関わりについて

図10のように、児童の振り返りの記述には、全体26名の約3分の１にあたる８名の児童が、助け合うなど人との関わりに関する記述をしている。教師は、上記⑥【中間の振り返りの実際】における波線㋐のような言葉掛けを単元を通して行っていた。このことは、英語の授業だけではなく、このクラスまたは学校全体で大事にしていることかもしれないが、教師の言葉掛けや普段の指導が、児童の意識に残り、行動に少なからずつながっているのではないかと考えられる。

（ⅲ）売る及び言語面について

言語面とは、英語の使用についての記述をまとめている。例えば、次に示すものがそれにあたる。

・How aboutが言えなかったからまたちがうときにがんばりたいです。
・今日は本番で上手に質問することが出来たけど交流員の方がおすすめはあるか聞かれた時にスムーズに言えなかったので、次は言えるようにしたいです。

児童の振り返りの記述を見ると、２名の児童が本時のめあて「島根の名物やお土産を売る」に関する記述をしていた。又、言語面に関しては８名の児童が振り返りとして記述を残していた。

この結果に至った理由として、「売った」かどうかは、児童たち自身が判断できるため、振り返りとしての記述件数が少なかったと言える。それよりも高次の「英語をどのように使ったか」という言語面に意識が向いたのではないかと考えられる。

（３）外国語科での単元構想の提案

上記（１）及び（２）を踏まえ、令和２年度より使用される教科書『NEW HORIZON Elementary English Course 5』（東京書籍）におけるUnit 6の単元目標、評価規準及び単元計画を作成した。

今回の作成に関して、意識した点は次の点である。

①年間指導計画の作成

英語の目標と照らし合わせて、どの単元でどの領域を重点的に育成していくかを考えた。

②単元目標及び評価規準の設定

令和元年 11 月に行われた全国指導主事会の資料を基に、本単元で取り扱う事柄や、言語の特徴や決まりに関する事項（言語材料）、当該単元の中心となる言語活動において設定するコミュニケーションを行う目的や場面、状況、取り扱う話題などに即して設定した。

③目標に対する具体的な児童の姿を表す例の設定

単元ゴール（児童が発する英文例）を明確にし、その姿に近づけるために単元を通してどこで、どんな指導をするとよいかを設定した。また、単元最後には、児童を見取る際の指標として活用したいと考える。

④教師の指導改善のためのポイントの記述

研究協力校の実践を踏まえて、単元目標や本時の目標に迫るための指導改善のポイントを記した。

６．まとめ

本研究では、小学校の教員が、今までの取組の成果を生かしつつ、新 CS で求められている資質・能力を育成するための教科指導を行えるように、現行 CS と新 CS を比較し、授業実践の実態を調査した。成果としては、教科化によって目標、指導内容、評価方法が変わることが明確になった点である。同時に、今までの小学校での取組（意味のある文脈の中で、意味のあるやり取りを十分に聞いた後に、自分の意見や考えを話す機会を設けることや、子どもの学びを見取り、認め励ますフィードバックをすることなど）が教科指導でも生かされることが分かった。この結果を踏まえ、小学校第５学年における一つの単元の指導計画を作成した。今後の課題としては、この指導計画で実際に授業をして、児童の実態に合った目標かどうか、目標を達成するための指導改善のためのポイントが機能するかを明らかにすることである。また、明らかになったことを基に、単元指導計画を使いながら、さらにバージョンアップさせていきたいと考えている。

最後に、本研究を進めるに当たり、ご協力いただいた松江市立津田小学校の管理職の皆様及び授業者をはじめ関係者の皆様に心より感謝の念を表したい。

引用文献

１）小学校外国語活動における評価方法等の工夫のための参考資料（平成23年11月）国立教育政策研究所　教育課程研究センター, p.19

参考文献

・小学校学習指導要領（平成29年告示）解説
外国語活動・外国語編（平成29年７月）
・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（小学校、中学校）第３編単元（題材）ごとの学習評価について（事例）（国立教育政策研究所　教育課程研究センター）
・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（小学校、中学校）（評価規準の作成及び評価方法の工夫等）【案】
第２編　各教科等における「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する際の手順（国立教育政策研究所　教育課程研究センター）

【資料　単元指導計画（案）】

1　単元名　　What would you like? ～ていねいに注文をしたり値段をたずねたりしよう～

（NEW HORIZON Elementary Course Unit 6）

2　単元の目標

丁寧に注文をしたり、値段を尋ねたりできる

3　単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
読むこと	〈知識〉 デザート(ice cream, cake)、主食(pizza, spaghetti, hamburger, ramen)の活字体について理解している。 〈技能〉 デザート(ice cream, cake)、主食(pizza, spaghetti, hamburger, ramen)の活字体を識別したり、その読み方を発音したりする技能を身に付けている。	レストランで、イラストを参考にしながら食べたい物を声に出して読んでいる。	レストランで、イラストを参考にしながら食べたい物を声に出して読もうとしている。
話すこと［やり取り］	〈知識〉 What would you like? I'd like (a salad). How much is it? It's (570) yen. 数(six hundred and eighty yen)などについて理解している。 〈技能〉 I'd like (a salad). How much is it? を用いて、注文したい物とその値段について伝える技能を身に付けている。	レストランで、簡単な語句や基本的な表現を用いて注文したい物と値段について伝えている。	レストランで、簡単な語句や基本的な表現を用いて注文したい物と値段について伝えようとしている。

5　単元指導計画

時	目標◆、活動○ 教科書の活動名【　】	評価			
		知技	思判表	態度	評価規準〈方法〉
1	◆丁寧に注文する表現が分かる。				
	○【Starting Out】 p.54, 55 ○【Let's Listen 1】 p.56 ○Small Talk 1：身近な料理 Picture Dictionary p. 9 の中で食べたいものを答える。 ○デザート(ice cream, cake)の活字体の読み方を発音する。				★本時では、目標に向けて指導を行うが、記録に残す評価は行わない。 [教師の指導改善のためのポイント] 本時で初めて丁寧な表現に出合うため、レストランで使うことを体験的に理解できるように場面設定をする。 Small Talk では、新出表現を意味のあるやり取りの中でたくさん聞くことを目的とするため、教師が尋ねて、児童が食べたいものを選ぶようにする。その際、児童が日本語で答えることも可とするが、教師が英語で置き換える。(例)(教) What would you like? (児) アイス。(教) Oh, you'd like ice cream. 読むことは時間が掛かることを知った上で少しずつ指導する。活字体の名前と意味とをつなげるように（c, a, k, e…cake ＝ケーキ)、活字体の読み方を発音する機会を毎時間設定する。
2	◆丁寧に注文する表現を言うことができる。				
	○【Let's Watch and Think】 p. 55 ○Small Talk 2：世界の料理 p. 60				★本時では、目標に向けて指導を行うが、記録に残す評価は行わない。 [教師の指導改善のためのポイント] 児童が新出表現を言えるように、デモンストレーシ

	世界の料理についての書かれた説明（p. 60）を読み、どの料理を食べてみたいかを答える。 ○【Let's Try 2】 p. 56 ・デモンストレーション ・ペア活動 ○ 主食 (pizza, spaghetti, hamburger, ramen)の活字体の読み方を発音する。				ョンの相手を変えて、新出表現を聞く機会を設ける。 例：①教師と ALT ②教師と児童 ③ALT と児童 本単元では、What would you like?の表現を言うことは求めていないため、教師や ALT が What would you like?と尋ね、児童が I'd like....で答えるようにする。ただし、児童の実態に応じて尋ねれそうであれば、ペアでの活動も実施する。
3	◆丁寧に注文する表現を言うことができる。値段を尋ねる表現を知る。				
	○Small Talk 3：島根のふるさと料理やお土産（別紙メニュー表） 教師が見せた島根のふるさと料理やお土産のメニュー表の中から、食べてみたい物を選び、答える。 【Let's Try 3】p.57 ・デモンストレーション 教師：How much is soba? ALT：At the restaurant, it's eight hundred, but at my restaurant, it's six hundred. 教師は、全体に How much is a cake?とクラス全体に尋ね、児童はメモ用紙に自分の考える値段を書き、一斉に教師に見せる。(値段が英語で言えれば言う) ・ペア活動 ○【Let's Listen 2】p.57	や			★本時では、「話すこと[やり取り]」の一部の記録に残す評価を行う。読むことの指導は行うが、記録に残す評価は行わない。 「話すこと[やり取り]」の記録に残す一部評価 ◎レストランで、I' d like （a salad）.を用いて、注文したい物を伝える技能を身に付けている。〈パフォーマンス評価：行動観察〉 [教師の指導改善のためのポイント] 本時で初めて（How much）を聞くため、どの場面で使われる表現かが理解できるように場面設定をする。
4	◆丁寧に注文したり、値段を尋ねたりできる。				
	○食べたいものを注文しよう 教師と ALT が経営するレストランで、メニュー表を見ながら食べたいものを注文する。		読	読	「読むこと」の記録に残す評価 ◎レストランで、メニュー表を見ながら食べたいものを注文している。〈行動観察〉 ◎レストランで、メニュー表を見ながら食べたいものを注文しようとしている。〈行動観察〉

5	◆レストランで注文したり、物の値段を尋ねたりするために、簡単な語句や基本的な表現を用いて注文したい物と値段について伝えることができる。				
	○【Step 1】 p.58 ○【Step 2】 p.58 友だちのレストランを訪れ、自分が食べたいものの値段を尋ねる。 ○デザート(ice cream, cake)、主食(pizza, spaghetti, hamburger, ramen)の活字体の読み方を発音する。 上記【Step 2】で選んだ食べ物の活字体の読み方を発音する。	や 読			「話すこと[やり取り]」の記録に残す一部評価 ◎レストランで How much is it? を用いて、注文したい物の値段を尋ねる技能を身に付けている。〈パフォーマンス評価：行動観察〉 「読むこと」の記録に残す評価 ◎デザート(ice cream, cake)、主食(pizza, spaghetti, hamburger, ramen)の活字体の読み方を発音する技能を身に付けている。〈行動観察〉
6	◆レストランで注文したり、物の値段を尋ねたりするために、簡単な語句や基本的な表現を用いて注文したい物と値段について伝えることができる。				
	○【Step 3】 p.59 具体的な児童の姿例 (おおむね満足できる状況) いわゆる B 児１：Welcome to Restaurant A. 児２：I'd like a fried chicken. How much? 児１：It's 450 yen. (十分満足できる状況) いわゆる A 児１：Welcome to Restaurant A. 児３：I'd like a fried chicken. Is it spicy? 児１：No, it's not. Would you like a spicy chicken? 児３：Yes. 児１：How about this one? It's spicy and good. 児３：Sounds good. How much? 児１：It's 600 yen. (努力を要する状況) いわゆる C 児１：Welcome to Restaurant A. 児４：A fried chicken, please. How much? 児１：It's 450 yen.		や	や	「話すこと[やり取り]」の記録に残す評価 ◎レストランで、簡単な語句や基本的な表現を用いて注文したい物と値段について伝えている。〈パフォーマンス評価：行動観察〉 ◎レストランで、簡単な語句や基本的な表現を用いて注文したい物と値段について伝えようとしている。〈パフォーマンス評価：行動観察〉